

ああ、相談業務

～愛菜ちゃんの話～

8

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

愛菜ちゃん家族

愛菜さんの家族構成は、父26歳、母24歳、長男5歳、次男4歳、長女3歳、愛菜ちゃん2歳の6人家族。父親は塗装関係の仕事。母親は専業主婦。母親自身8人兄弟の5番目で、市では子たくさんだけではなく、障害を持つ子が何人もいることから有名な一族の次女であった。市内に母方祖父母や兄弟が住んでいる。父親は三人兄弟の次男で、実家は本州にあるが早くに家を出てきており、疎遠な状態であった。

愛菜ちゃんの兄（次男）は脳損傷から歩行困難と知的障害を持つ障がい児で、リハビリのために母子通園センターの訪問を受けている。長男、長女、愛菜ちゃんは保育園に入園している。

相談の始まり

今回のケースは、愛菜ちゃんの1歳半児健診未受診から、家庭の事情を勘案して、訪問で発達検

査を実施したことから始まった。1歳半児健診未受診の場合、保健師から何度か勧奨し、それでも受診されない場合は保健師が訪問して確認することが多い。保育園を活用していれば、保育園での様子を確認することもできる。しかし本ケースでは、心身障がい児と三人もの幼児を抱えていること、子どもたちは保育園児だがほとんど通えていないことから、訪問での実施となった。

相談経過

北海道も桜がそろそろ咲くかなという4月終わりに、家庭訪問をした。

愛菜ちゃん（以下本児）が住む家は、二階建ての一軒家である。玄関を入ると、ダイニングルームで座卓がどんとあり、奥に台所がある。座卓のある部屋の隣が居間兼夫婦の部屋のようなだった。子どもたちの部屋は二階にあるそうだ。部屋は子どもが多い割には、きちんと片付いていた。

訪問時、父親は留守、障害のある次兄と本児

と母親がダイニングルームにおり、長兄と長女は二階で遊んでいるとのことだった。

本児はおかっぱ頭にピンクのジャージズボンと紺色の少しよれよれになった半そでシャツを着ていた。兄はヘッドギアを付けていて、言葉はなく、座卓に寄りかかりながらなんとか伝い歩きをしていた。本児も兄も、訪問者に興味津々という感じで寄ってきた。兄は、やっと立つことができるようになった1歳ごろに、倒れて頭を机の角にぶつけ、頭蓋骨骨折から脳損傷を起こしたと聞いていた。頭蓋骨はまだ穴が開いた状態で、脳を保護するためにヘッドギアを使っているのである。伝い歩きをしている兄は時々倒れそうになるので、また頭をぶつけるのではと、いくらヘッドギアを付けているとは言え、ひやひやした。母親は慣れっこなのか、あまり気にしていない様子だった。

本児はとても人懐こいところがあり、発達検査も楽しんで受けてくれた。発達のには問題なかった。言葉もほぼ順調だった。母親にも本児の発達は問題ないことを伝えて、保育園にできるだけ通わせるようにと話をした。途中で長兄が二階から降りてきたが、騒がしく、落ち着きもなく、母親の注意も指示も通りにくい感じで、年齢からしたら幼いと思われた。母親もただでさえ次男の世話で大変なのに、長兄含め三人の子の面倒を見るのはさぞ大変だろうと思われた。母親は大変だとは言わないものの、怒鳴って言うことを聴かせようとしている様子から、やはり大変なのだろうと感じたため、保育園をより活用するよう勧めたのである。

しかし母親は、本児たちを送り迎えすることができないという。母親は免許を持たず、父親は朝早く出てしまうし、帰宅は夜遅い。従って父親にお願いすることもできない。兄の病院受診があるときはタクシーを活用し、その費用は障害児への補助として配布されているタクシー券を使っているので困らないが、保育園に毎日タクシーを使って送っていくことはできない。

何とか子どもたちが保育園に通える方法はないものか？役所に帰ってから考え、あちこち相談してみた。その結果、地域の主任児童委員の方が、送り迎えをして下さるといので、お願いしてみることにした。毎日というのは申し訳ないので、できる範囲でしてもらうこととなった。こうして本児たちは以前よりずっと保育園に通えるようになった。

数か月ほど経った、北海道の短い夏の始まりのころ、保育園から相談があった。長兄は多動で指示が通らず、園で対応に苦慮しているし、姉と本児の服装が全く異なるというのである。以前は、たまにしか来なかったのでそれほど気にならなかったが、ほぼ毎日来るようになって、様子がはっきりしてきたようである。よくよく聞いてみると、姉は、髪を長くして、かわいく結ってリボンを付けてくる。服装も、かわいらしい服を着せている。しかし本児は、いつもおかっぱというより、残切り頭で服は兄のお古と思われるシャツとジャージのズボンばかり。サイズも本児に合っていないというのである。ただ、決して洗濯されていないということでもないし、ボロボロというほどでもない。兄弟間差別があるようだといのである。送り迎えをしてくれている主任児童委員さんにも聞いてみたが、朝や夕方の母親の様子からは、そこまで本児への対応が気になるということはないとのこと。今しばらく特に気を付けて様子を見てもらうように保育園にも、主任児童委員にも伝えた。

その後、しばらくして、保育園から本児のほほに痣があり、聞いてみたら母親に叩かれたと訴えているとの連絡がきた。写真を撮っておくように伝えて、確認に行った。確かに左ほほに3cm程の痣がついている。どうしたのか聞いてみると、母親の言うことを聞かなかつたから叩かれたようだった。

児童相談所に通告し、児相福祉司と一緒に訪問することになった。母親との関係は前回の訪問や、主任児童委員さんを紹介したことで良い

方だったので、同行し、母親の困り感を聞くようにした。母親の話では、本児が食べ物に対し意地汚いという。他の子と同じように食事を与えているのに、三角ごみとりに捨てたようなものまで食べようとするので、何度も注意したが、やめないで叩いてしまったのだそうだ。もともと本児は頑固で、姉と違って扱いにくいと感じていたという。児相福祉司から、いうことを聞かないとしても、叩いてはいけないという話がされ、母親は「以後気を付ける」とのことです。今回は月 1 回、家庭児童相談員が訪問し、母親のストレスを軽減するよう話を聴いていくこととなった。

話を聴く中で、母親自身、多い兄弟の中で愛情不足で育った感じがあった。それ故、次女という同じ立場の本児に対し、ことさらきつく当たっていたように思われた。母親は意識をしていないが、原家族における自分の投影である。本児が食べ物を欲しがるのは、愛情不足からくるものであるのは明らかだったので、母親との関係性を回復していくことが必要ではと思い、母親と本児の時間をあえて持つようにという処方をした。しばらくの間、母親は本児との関係性を回復し、本児の表情も良くなっていった。そして、夏が終わりそうなところに、母親の懐妊が発覚。第 5 子出産に向けて母親のストレスが上がっていった。

母親との話の中で、まだ夫婦とも若いので、まだまだ子どもが欲しいのかという話をしたことがあった。その時母親からは、母親自身も兄弟が多かったので、子どもは沢山ほしい、野球チームが作れるくらいほしいと言っていた。父親も同様の考え方だと聞いていた。子どもを妊娠したら生むというのが父母の考え方であった。したがって今回の妊娠は特に驚くような話ではなかった。ただ、出産となると、入院中、子どもたちの面倒を誰がどうみるか、障害児もいるのでその対応を誰がするのか、母親の両親は、母親の弟に重度の障害があってその子の面倒を見ているため、次兄の世話を見ることはで

きない。父方祖父母は遠方にいるし、関係性も薄いため頼めない。あとは父親が何日休めるかということになる。母親の出産に問題がなければ、1 週間とかからず退院できる。

今までの出産ではどうしていたのか尋ねたところ、母方伯母と伯父夫婦が手伝ってくれたそうで、今回も又お願いするつもりとのことであった。そういうことなら心配しなくても大丈夫となり、月 1 回の訪問を続けながら出産まで見守った。本児に対し、イラっとして怒鳴ることはあっても、叩くことはなかった。

翌年 3 月末に男児を出産し、4 月には長兄が小学校に入学となる。初めての小学校生活に向けて、母親はこまごましたことも何とかこなし、無事に入学となった。長兄が落ち着きがないことについては、母親と何度か話し合い、発達検査と医療機関の受診を勧め、ADHD の診断が出た。この 1 年近くの付き合いの中で、次兄がけがをしたのは、長兄が突き飛ばしたことが原因という話も聞いた。長兄の ADHD については、学校や医療機関とも連携しながら、支援していくこととなった。そして、姉と本児については、保育園ではなく幼稚園を活用することとなり、

園バスが目の前まで来てくれるので、しっかり通園できるようになった。幼稚園の方に、いままでの経過を伝え、本児については気を付けてみてもらうようにした。赤ちゃんが生まれたことでの変化を確認し、特に問題がなかったことから、児童相談所とも相談して一旦終了となった。

しかし、その後半年ほどたったところに、幼稚園から通告があった。本児の太ももを母親が箸で刺すという事件が起こったのだ。

再び児童相談所と訪問し事情を聴くことと同時に本児は一時保護となった。母親の話では、相変わらず頑固でいうことを聞かないところがあったが、今回、隠れてお菓子をたくさん食べ、ご飯を食べなかったことに母親が腹を立てて、つい箸で太ももを刺してしまったというこ

とだった。警察が入れば傷害罪で母親が逮捕されるような話であったが、警察介入はなかった。今回は父親にも話を聴いたが、母親も父親も本児と暮らすのは無理と言いきり、施設活用をお願いしたいとなった。本児も家から離れることに抵抗もなく、すんなりと擁護施設措置(1)となってしまった。本児が施設入所になってからも時々訪問して様子確認をしていたが、母親は長男に怒鳴ることはあっても叩いたりということもなく、家族は比較的安定していた。第6子は女の子で、父母ともにとてもかわいがっていた。本児についても、「施設で楽しくやっているみたいで、安心している。盗み食いの癖がなくなると良いが」と母親は話していた。

こうして本児は幼稚園を卒業し、小学校高学年まで養護施設で過ごすことになった。最初のうちは帰省はなく、児童相談所での面会のみであったが、その後は毎年何回か帰省したり、本児の学校行事などに父母兄弟が見学に行ったりして、親子・家族関係を継続していた。

児童相談所の話では、「本児は学校で楽しく過ごせており、施設でも友達と一緒に遊んだりなど、適応的に暮らせている。成績は中の下か下の上くらいで、運動なども特に目立つところのない、おとなしい感じの子というのが学校の評価。盗み食いというか、隠れてお菓子を食べるというようなことも施設では見られない。」とのことであった。

小学校6年の夏の帰省後の児童相談所との面談で、引き取りたいという話が出た。今までの親子の様子を学校や施設から聞き取り、本児も家に帰りたと言っていることから、中学入学前に施設措置解除(2)とすると連絡がきた。

小学校の卒業式には出たいという本児の希望もあり、3月中旬の小学校の卒業式後に措置解除となり、家に戻ってきた。中学入学の準備も母親が着々と進めていて、入学式にも母親が参加した。

本児が小学校を卒業するときに、筆者も家庭児童相談員を退職し、臨床心理士としてカウン

セリングルームを立ち上げ、様々な家族支援を行い始めた。そのことは母親にも伝えてあり、何かあったら相談に来てと名刺も渡していた。

順調に家族再統合が進んだものと思っていたが、中学1年の終わり、節分のころに本児がまたお菓子を隠れて食べるようになったという相談で筆者の私設事務所「かかし」に母親が来た。母親からは、長女はそういうことをしないのに、何故だろうという話が出た。母親にいままでの事、自身の過去の育ち、本児に対してと姉に対しての関りの差などについて、確認しつつ、何が問題だったかを再度一緒に考えてみた。母親は自分自身の育ちの問題、原家族の中で母親が幼少期からほとんどかまってもらえず、障害のあるこの世話をしながら一人で頑張ってきたこと、原家族でも長女は見た目もかわいく、兄弟の中では賢かったこともあり、両親がとてももてはやしていたこと、それに比べて母親は、頑固でかわいげがないといつも言われていたこと、母親自身がとても寂しい思いをしていたことなどが語られた。そう語りながら、母親は本児の気持ちを少し理解できたと話した。

数日後本児もつれて来室。本児にはトラウマ処理をしたうえで、母親と本児との関係性を強化するために、何度か二人で面談に来てもらうようにした。二人だけの時間を持てることで本児も安定し、盗み食いのようなことはなくなった。それでも、3歳から12歳まで離れて暮らしていたことからくる関係性の薄さは、中々埋めることが出来ず、ちょっとしたことで本児が母親からひどく叱責されることが繰り返された。

母親と本児の面談を繰り返しながら、本児には、中学を卒業したら遠くの高校に行くなどして家から出るか、経済的にそれが難しければ高校卒業と同時に就職し、家を出ることを提案した。本児も「高卒後は家を出たいし早く働きたい」と自立に向けた気持ちが育ってきた。

本児たち一家は、本児が施設入所したあとも

家族が拡大し、三女の他に 3 人生まれ、兄弟の数は 8 人になっていた。そして本児が高校に入るときに、家族全員で本州の父方実家のそばに引っ越していった。本児も母親との関係があまりよくないことに悩みつつも、何とか家族の中で生活していき、高校卒業まで頑張っ、その後就職し、自立していった。

まとめ

本ケースは、決してうまくいったというものではない。母親から虐待を受けた本児の心の傷は、完全に癒えたとは言えないだろうし、母子関係も多少は良くなってもらえてきた溝を完全に埋めることはできなかった。

本児は最初からあまり表情のない子で、父母に対し、頑固さを示すことで主張するため、かえって父母から疎まれるという悪循環の中にいた。虐待ケースでは児が頑固ということは多々ある。頑固であることは自己主張なのだから、良い意味で捉えてもらえればよいが中々難しい。両親の言う通りには動かないため、「関わりづらい、面倒な子」というイメージになり、それが虐待に繋がってしまう。子どもは愛情を十分に受けられないとその不足を何かで補おうとする。本児の場合それが「食べること」であった。母親は決して食事を与えないなどとい

うことはなく、子どもが沢山いて大変なのに、むしろしっかり食事を作る母親であった。愛情が不足しているために、いくら食べても満腹感を得られない状況だったから、本児はお菓子をあさったり、三角ごみとりまであさったりしてしまったのだ。そう伝えて、時には良い母親になるのだが、良い状態にしてもすぐにそうした問題行動が消えるわけではないので、我慢しきれず、その行動があてつけがましいと思えて、受け入れがたくなってしまったのだ。

家族を引き離すことは、本ケースの場合は容易だった。父母は手放したいと言ったし、本児に対し身体的暴力は明らかだし、本児もその時は父母や兄弟から離れたら楽しい生活が待っていると思ったのだろう。しかしいったん離れてしまうと、いくら年に数回面会交流をしても、関係性はどうしても薄れてしまい、むしろ理想化が始まり、母子共に良いイメージだけを持つようになるだろう。再統合した時に、最初は良いがそんな良い関係ばかりが続くはずもなく、少ししたらイメージと違う現実に母子ともがっかりしたり、幻滅したり、傷ついたりする。

母親自身が自分自身の育てなおしをし、本児と自分を重ねないようにすれば、母子ともに安定した関係を保てただろう。当時はまだ、育てなおしのすべを持たず、未熟な心理士だったこともあり、どうしてもうまくいかなかったこの母子の事は反省の気持ちとともに、今も心に残っている。